

# 肉体の門

映画文学人生論

原作：田村泰次郎 (1947) 「風雪社」

参考：『蝗』 (1964) 「文藝」

監督：鈴木清順 (1962)

脚本：棚田五郎

出演：ボルネオ・マヤ 野川由美子 撮影：峰重重  
小政のおせん 河西郁子 音楽：山本直純  
伊吹新太郎 宍戸譲

彼女たちにも掟がある。それは自由を  
確保するための掟である。

田村泰次郎の『肉体の門』は敗戦によって焦土と化した日本の実状を後世に伝える作品で、これまでに四度映画化されている。そのうち鈴木清順監督の映画を観た。「赤いリンゴにくちびる寄せて」や「こんな女に誰がした」という当時流行した歌謡曲が使われている。

対象になっっているのはパンパンとよばれる娼婦で、まさに「こんな女に誰がした」という歌詞にあっているが、原作を読んでみると、歌詞が使われているのは復員兵の伊吹新太郎がうたう、

友を背負いて路なき路を

行けば曠野は夜の雨、――

という軍歌だけだ。娼婦たちは手をたたいた。マヤはボルネオで戦死した兄のことを思い浮かべ、兵隊の苦労と、その生命のあわれさが身にしみるような気がした。関東小政のせんは「婦系図」、ジープのお美乃は「ジープは走る」をうたった。

彼女たちは十八歳か十九歳。軍需工場で汗と機油にまみれて働いていたふつうの女の子だ。しかし、爆弾とともに家や家族を失い、法律も世間の人という道徳もどつかへふつとんでしまった。生きるためには食わねばならない。彼女たちは食うためにパンパンになった。仲間と焼けビルの



# 肉体の門

映画文学人生論

地下室に巣をつくった。

彼女たちにも掟がある。たとえば、正当な代価を受け取らずに自分の肉体を男に与えてはいけない。それは自由を確保するための掟だ。原始人のタブウのような、獣の世界にある「群」の意識のような、自衛と生存のための連帯の秩序である。

そんな彼女たちの巣に迷い込んだのが復員兵の伊吹新太郎。戦地から持ち帰った原始的本能と俊敏な闘争力を持つ復員兵はいつのまにか群の中心に置かれるようになった。ちょうど、一匹の牝犬をまんなかにして、四匹の牝犬がお互いににらみ合い、牽制しあうような関係である。

いつまでもそんな状態が続くはずがない。掟をやぶったボルネオ・マヤは裸のまま天井から宙づりにされて、仲間からリンチを受ける。地下の闇に、宙づりにされたボルネオ・マヤの肉体は、ほの白い光の暈につつまれて、十字架の上の予言者のように荘厳だった——というのが結末である。

原作者の田村泰次郎は中国山西省で五年三ヶ月にわたって従軍し、生き残った経験者だ。五人の従軍慰安婦を連れて、前線の部隊へ届ける『蝗』という小説も残している。「長い野戦の生活で、私はもっともらしい「思想」や、えらそうな「思想」をかかっている日本人が、獣になるのを体験した」という。「私もその獣の一匹であった」。

おまえらも獣なのか蝗ども